
ランドセル

真木 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ランドセル

【Nコード】
N8324K

【作者名】
真木 葵

【あらすじ】
幼馴染みの新一が居なくなつた日に、蘭の目の前に現れた少年。そして新一が戻ってくる前日に、イギリスへ行く事になったと言つて別れたコナン。新一は戻ってきたのだけれど・・・

今でも時折、思い出す。

ふとした時に、玄関をあけて「ただいま蘭姉ちゃん」何て言つて帰ってきて、リビングでTV見ながら私が作る夕飯を待つてくれる…そんなこの間まで日常だったあの頃に戻るんじゃないかって。

けど…

あの眼鏡をかけた少年は、もう居ない。

お父さんの部屋に布団を敷いてあげる事もないし、夜遅くまで本を読んでいる事を咎める事もないし、私の用意する朝ご飯を寝ぼけ眼で食べてくれる事もない。

事件が起きるとお父さんよりも先に現場でうろろし始める、お父さんからゲンコツを貰つて怒られる事も、きつともうない。

少年探偵団の子供達も三人だけになってしまつて、それでも子供達はたまに事務所に遊びに来てくれるけれど、メンバーが二人抜けてしまつてとても淋しそうにしている。

事件と推理とサッカーが大好きな、アイツにそっくりな小学一年生の男の子は、アイツが居なくなつた日に私の側に現れて、アイツが戻ってくる前日に…私の前から居なくなつた。

母親と名乗る女性が連れて帰つた。イギリスへ行くと云つて居た。必ず手紙を頂戴ねと約束した、メールアドレスも電話番号も変えたら教えてねつて指切りをした。

私の側から居なくなる時、私はとても淋しい気持ちでいっぱいだった。

けれど…コナン君は何処か嬉しそうな顔をしていた。

きつと行き先が、あの子の大好きなシャーロックホームズの舞台でもあるロンドンだからだろう。そんな所も、何もかも、新一にそっくりで困惑する。

じゃーね、蘭姉ちゃん！

まるで「また明日ね」何て言いたげな素振りで、コナン君は行ってしまった。手を振って、車に乗って、そのまま成田へ向かうタクシーを私はずっと見つめていた。お父さんに何て言われたか覚えていない。けれどそれが本当に最後の別れのように、涙を堪えるのに必死だった。

新一が戻ってきて、元の生活に戻ったか様だったけれど、コナン君の存在がこんなに私の中で大きくなっていった事…あの子が居なくなつて初めて気がついた。

もしかしたら本当に新一なんじゃないかと何度も疑った位、コナン君は新一にそっくりで…あの二人が一緒に居る所をほんの数回だけけど見かけたのに、それでも私は信じられなくて。

言葉の端々に、態度の端々に、新一を感じる眼鏡の男の子。

まるで「新一の帰り」を待っていた頃に舞い戻ってしまったような私の心。何だかとても複雑な心境で、お父さんと二人きりのリビングで過ごす夜が、本当に淋しい時間になってしまった。

何故だろう。

新一は戻ってきたのに…

「…蘭…？」

「…」

「…おい、どした？」

パジャマのまま一階へ下りると、リビングには既に朝食の準備がしてあった様で良い香りが漂っていた。新一はあくび三昧でキッチンを覗くと、朝食を用意してくれていたのであろう幼馴染みの姿がない。リビングに顔を覗かせると、蘭はぼんやりと窓の外を眺めていた。

「風邪でもひいたのか…？」

「…え？」

何度か声をかけても反応を示さなかった蘭の額にそつと掌を添えると、ようやく気がついたのか慌てて振り向いた様子で居た。

「あ、おはよう新一」

「どうしたんだ？ぼーっとして」

「うつん、ごめん何でもない。ご飯出来てるよ」

「ああ悪い、サンキュ」

ソファに座り、蘭の準備してくれた朝食の前で「頂きます」と言つて箸を持つ。コナンだった頃に毎日頂いていた蘭のご飯も、相変わらず美味しかった。

キッチンからマグカップを二つ持ってきた蘭は、一つを新一の側に置く。白い湯気の香り立つコーヒー、蘭は自分用にミルクを多めに入れてカフェオレにして持ってきていた。

「今日も警視庁へ？」

「ああ十時には高木刑事が来てくれるらしい、資産家の遺産相続関連の問題で起きた失踪事件で、死体があがったらしいからね」

朝食を取りながらまるで天気の話でもするかのような感じでそう言い放つてしまう彼は、居なくなる前と何も変わらない、相変わらず事件好きの探偵だった。

「遅くなりそう…？」

「どうだろう、行ってみない事には何も言えないからなあ」

「そっかあ」

春休みだというのに連日連夜、目暮警部に駆り出されている名探偵。蘭が勝手に押しかけて朝食を準備してあげるこのわずかな時間くらいしかのんびり会話する事がない。

新一もそんな蘭の心情を知ってか知らずか、わざわざこうして食事の用意をしに来てくれる蘭に申し訳ないと思いつつも甘えてしまっていた。両親は海の方こう、一人で生活していれば食事は外で取る事が殆どだから、こうして蘭が来てくれる事はとても幸せな事だった。

「ねえ新一」

「ん？」

「…」

ゆっくりと揺らすカフェオレに視線を落とす蘭が、淋しげな表情で新一を呼んだ。毎日毎日逢って居ても埋まりきらない寂しい思いをさせてしまっている事を名探偵は気がついて居なかった。けれど蘭の本心は何処かそれとは違う物だった。

「コナン君、元気かな…」

「えっ…ああ…ど、どうしたんだ？急に」

思わぬ言葉に驚いて、新一は問い掛ける。

「新一は一緒に暮らしていたワケじゃないから知らないだろうけど、あの子ね、小さい頃の新一にとても良く似ているのよ」

「そ、そうか…？お、俺は眼鏡なんか掛けてねーぞ？」

「違うわよ、外見とかじゃなくて…外見も似てるけど、そう言うんじゃないかってね。…あの子、事件と聞くと一人で走り出しちゃって、私もお父さんも知らないような事を知ってるし。危なっかしかったけど、それでもね…それでも…私の事をずっと守ってくれていた様な…そんな感じの男の子だったのよ」

体が小さくなっても、変わらず蘭の事を見守っていた新一。本当の事を隠すのもあの日で終わった筈だった。新一に戻ってしまえば、蘭は喜んでくれる。新一の帰りをずっと待っていた蘭を、コナンとせずと見てきたから。

しかし今は…蘭はコナンの安否を気遣って居る様だった。外国に行くと言えば早々逢えるものじゃない。時差があるから電話も難しい、暫くはイギリスに住む父の友人宅に頼んでおいた郵便の転送とメールだけで何とか凌げるだろうと考えていたが、それが浅はかだったと初めて気づく。

「蘭…」

「…新一にも、逢わせてあげたいわ。本当に…子供とは思えない位、かつこよかったのよ」

蘭の瞳がうつすらと光る、新一に戻ってもなお彼女に淋しい思いをさせてしまっている事が、もう新一には耐え難い苦痛だった。箸を置き、そつと蘭の背へと腕を回し、優しくその身を抱き留める。

「解った。全部話すよ」

「え…？」

急に立ち上がった新一は、そのままリビングを出て行く。蘭は一体何が起きたのかと思い、慌てて新一を追った。一体何処へ向かうのかと思いきや、階段をあがり、新一は自室へ向かう。

「バレ無いように、服とか靴とか全部処分したから、証拠っていう証拠はないんだけど」

自室のウォークインクローゼットの中から、両手で抱えた段ボールを出してきた。端からガムテープをはがす。新一は少しだけ困ったような顔で蘭に呟いた。

「怒っていきなり鉄拳はやめてくれよな、謝るからさ…」

そう言っただボールの中から、新一はそつとコナンの持ち物だった荷物を取り出した。

「これは…」

サッカーボールのキーホルダーが付いた、眼鏡の少年が背負っていたランドセル。

蘭は溢れんばかりの感情を抑えて、そのランドセルを受け取った。

確かに覚えている、このキーホルダーも、所々に出来た小さな傷も、あの少年がいつも背負っていたランドセルに間違いなかった。

「どうして、どうしてコレを新一が持っているの…？」

「まあ、その、なんつーか…」

照れ隠しに指で頬を掻く姿も、昔と変わらない。それどころか、やはり新一とコナンは似ている。似すぎている。同一人物だと思っ

た方が遙かに信じられる位にそっくりなのだ。

「まさか」

蘭の頬を、堪えきれない涙が伝う。怒りの鉄拳が飛んでくるかと思いきや、突然目の前で号泣する蘭に驚いて、新一は慌てふためいた。

「ら、蘭…！」

何処から何から説明をすればいいか戸惑っていたが、ランドセルを抱きかかえたまま涙を流す蘭に、新一は為す術もない。困惑しながらただ「悪い」と連呼する他ない。

「コナン君…やっぱり…新一だったのね…」

そう、やっぱり。

他人のそら似なんかじゃない。

新一を想う心が、コナンに惹かれていたのは紛れもない事実だった。新一を想う偽りのないその気持ち、コナンを新一だと指し示していたのだ。

「良かった、良かった」

ランドセルを胸に抱く蘭を、新一はそつと腕に包み込んだ。彼女の髪を撫で、安心させてやるように何度も何度も「悪かった…」と繰り返した。

「ありがとう新一」

何も告げずに居なくなった新一をずっと薄情な奴だと思っていたけれど、彼は小さな姿でずっと自分を守ってくれていたのだと知った。どんな事件に巻き込まれても、全く帰ってこない新一の代わりにずっと守ってくれていた少年。けれどそれが新一だった。

蘭の心の中の少年は、目の前の新一と全てが重なった。

「ありがとう…コナン君…」

ランドセルをぎゅっと抱きしめ、蘭はようやく微笑んだ。

そつと胸中で「おかえり、コナン君」と、精一杯の笑顔で囁いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8324k/>

ランドセル

2010年10月8日14時14分発行